

道祖神への願かけ

匠探

②1

六社神社のイボ神様

最近あまり耳にすることがなくなつた「イボ」。感染によつて皮膚にできる小さな

「できもの」をいい、医学が進歩していなかつた時代には、カミヤホトケに祈つて治すことしかありませんでした。その対象となる神仏は、イボ観音やイボ薬師、イボ地藏など多種多様ですが、「道祖神」ど

うそじん」に願かけをしたことを紹介します。

野手の六社（ろくしゃ）神社の鳥居をくぐり参道を進み、すぐ右側に石の祠（ほこら・石祠・せきし）があります。これをまつたいきさつは、次のようなものでした。

大根畑の与惣左衛門という人が総代となり西国まいりを行った。一行は無事に帰ることができたので、六社神社境内に「道祖神」をまつりたいと願ひ出、神社側がこの願ひを聞き入れ石祠がまつられたといふ。

1802年（享和2）正月に与惣左衛門が神主に差し出した文書に書かれた内容です。

道祖神は、一般的には集落の境や分かれ道の端などにまつられ、村の守り神、交通安全の神など所願成就（しよがらんじようじゆ）の神として信仰されています。道祖神は全国的に分布し男女が並ぶ像が刻まれたものなどが知られています。市域では「道祖神」と文字を刻んだ石祠がほ

とんどです。造立者は個人や村全体で建てることが多く、中には何も刻まれてないものもあります。

六社神社境内の道祖神が「イボ神様」と呼ばれていることに興味が引かれます。はじめは、西国まいりが無事だったことに感謝して建てられた道祖神が、あるとき「イボ」になつた人が祈願したら効果があつたので「イボ神様」として信仰する人が増えたのでしよう。

現存の道祖神は、1862年（文久2）に建てられました。この年は全国的にコレラ、はしかが流行し多くの死者が出たとされますが、野手村では一人の死者も出なかつたといひます。

20年前ごろまでは、道祖神に小石が供えられていたとされ、ここの玉石を持ち帰り患部をこするとイボが治り、お礼に石の数を倍にして返したのだといふ。しかし、今行つてみると、玉石は見られませんでした。これも時の流れなのでしょう。

1通の記録が残つたことで、1基の道祖神の由来などを知ることができました。

関八日市場図書館 ☎73・3746



六社神社境内にある道祖神